

大般若經の民俗信仰について

— 四國・九州を中心として —

橘 恭 堂

大乘佛教經典は云うまでもなく、釋尊の思惟と實踐に照されておのずから形成されたものであり、釋尊と同一の正覺を得んがためにその方法が説かれたものであつて、云うなれば經典それ自體は月を指す指であり、月そのものではない筈である。然るに庶民信仰の立場においては種々の經典がその教理内容の如何を問わず、經典それ自體を呪術的信仰の對象とする傾向があり、とくにわが國では佛教受容の當初からこの傾向の強かつたことに注意したのである。就中大般若經六百卷は既に周知の通り釋尊の根本的自覺たる般若空觀を内容とする經典であるが、これがわが國に於ては、五來重先生の記念碑的論文「民俗信仰としての大般若經^{註(1)}」で總括的に論じられている如く民俗信仰として屢々用いられているのであり、この種の民俗信仰はわが國常民の基層文化と生活にささえられて或は年中行事として或は臨時の祈禱法會としてつねに繰り返され行なわれているものである。これがたまたま國家的行事として行なわれた場合には正史目錄に留められることがあつたにしても、常民の行事と信仰は文獻記錄に遺されたことは殆んどないのである。然しわが國では年頭大般若、回村大般若、雨乞大般若、疫病除け大般若等々と呼ばれるが如き、民俗信仰とし

て生々と傳承せられているのであつて、大般若經信仰の實態を具體的に示すものが多い。これらは現象としてはいかに多くのバラエティーに富んでいても、その根底には常に常民の心意識の底をながれて古代から現代に至つた共通の觀念が内在しているのであつて、この共通の觀念を發掘する事なくして大般若經の信仰を云々する事は出來得ないと思ふ。

さて五來先生は先の論文に於て既にいくつかの調査例を示されているが、我々はより廣い地域に於いてこの種の民俗信仰の實態を調査採録して更に客觀的・普遍的な結論へのアプローチを試みなければならないのであつて小論では四國・九州地方に於ける大般若經信仰の二、三の調査例を呈示し、この信仰の重要な一面と、それに關連する民俗との重なり合いを問題として取り扱つてみることにしたい。

ところで四國・九州地方はわが國中央文化圏からは遠く、比較的にわが國固有の基層文化の傳承度の高い地域であるから、これらの地域に於ける大般若經に關する信仰と行事の實態は興味ある問題を含んでいると考えなければならぬ。なお次に述べる具体例は昭和卅六年九月初旬に實地に於て採録したものである。

一

本山寺 香川縣觀音寺市本山 (眞言宗)

舊曆正月十八日に當寺に於て、お經開きと稱して大般若轉讀が行なわれるが、それ以後新曆六月中旬を過ぎ田植が濟むと檀家の十ヶ部落で各々轉讀が行なわれる。これは夏祈禱といわれ、疫病除けを目的とする信仰行事である。この場合は部落で都合のよい日を寺へ申し出ると寺から住職役僧が出張して、その部落の小菴か又は在家で大般若を轉讀する。またその部落内を大般若の入つた經箱を青年が舁いで廻り、村人はこの箱の下を潜る(ブルと云う)と厄が

落ちると云つて皆これを行うが、これは舊曆六月晦日の夏越の神事と同型のものであろう。即ち京都上賀茂神社、大阪住吉神社をはじめとして、各地の神社で行なわれる大祓に、茅の輪、菅貫をくぐり災難疫病を免れると云う信仰があり、この神事は古代より文獻に屢々見られる六月、十二月晦日の大祓と同根のものである。なお大般若の轉讀のあとその部落の村境の道端に、部落内に惡靈の入つてこないようにとの信仰から大般若の祈禱札を竹にはさんで立て、更に戸口にもこの札を貼る。

法圓寺 愛媛縣大州市三善 (眞言宗)

舊曆二月初午の日に鎮守の稻荷大明神の法樂の爲に當寺の本堂で大般若六百卷を轉讀し、このあと各部落の若衆が三箱に入つた大般若の經箱をそれぞれ三人ずつで舁いで檀家を回るが、轉讀を希望する家では座敷に新しい藁か或は稻藁をしてこれを迎へ、その上に經箱を安置し、その前には供物をととのえ、箱の上には大般若經十卷及び本尊(不動尊)と脇侍(矜羯羅、制吒迦兩童子)の軸物を箱入りのままかざつてその十卷を轉讀する。最後の十卷目は理趣分であつて、參列者の人々の頭上で轉讀する。この轉讀を受けると憑き物が除かれ、流行病に罹らぬ、災害を免れる等の實例が多くあり、逆にこの大般若の祈禱を受けない家は凶事、災難が不思議にあると云つている。村人はこの行事は百年以上續いていると云うがその正確な始行はわからない。また當寺の場合も奉書にて般若札を作り竹にはさんで村境に立て、各家には戸口に貼るものもあれば佛壇に安置するものもあると云う。これは惡靈の入つてこぬよう、部落安全、家内安穩の爲であり、病氣のものはこの札を小さく切つて服用すると全快すると云つている。しかしこの村の大般若轉讀が初午に行なわれるのは、初午が山の神を田の神と招きおろし春の農耕に先だつて豊作を祈る行事として民俗學では解釋されているので、おそらくもとは農耕儀禮をともなつたものであつたであらう。

清淨光寺 大分縣西國東郡竹田津町 (天臺宗)

古くは舊曆四月八日に轉讀を行なつていたがこの行事は止めてから廿年ほどになる。止める直前頃には舊曆四月十五、六日頃に行なつていた。これは夏祈禱にはすこし早く、四月八日が山の神を花枝でまつる行事に關係があり、村人は一般にこの日の行事を麥祈禱と呼んでいた事からも農耕儀禮であることは疑いないものである。この日には阿彌陀如來の名號の書かれた巾三十種、長さ一・五米位の紙の本尊幡一枚と、十六善神の名號の書かれた巾三十種、長さ一米位の紙の小幡十六枚をそれぞれ青竹の先につけたものを子供が持つて先頭に立ち、この寺の住職が導師となり十六善神を袂紗に包んでシメにまいて持ち、そのあとに組寺の僧がつづき、最後に村の者が半鐘とドロ(大太鼓)を打つて(虫送り念佛を想起させる呪具)行列を作り竹田津町西方寺部落内を午前中に行道する。この間道中で般若心經を讀む。晝頃に寺に歸り、晝食後當寺で組寺の僧等によつて大般若六百卷を轉讀し、導師は理趣分を讀む。行事の濟んだあとで般若札(祈禱符)の大札を上・中・下の部落境に各一本立て、寺と區長の家の前に各一本を立てる。また小札を檀家中に一枚ずつ配り各家の戸口か佛壇の横に貼る。この札は畑作に害をなす惡靈を村から追い出し、また村内、家内に入らぬようにする爲の呪符である。

文珠仙寺 大分縣東國東郡國東町 (天臺宗)

舊曆八月中の適宜の日に大般若轉讀が檀家の藁藁部落で行なわれていたが、この行事は第二次大戰後行なわれなくなつたと云う。行なわれていた當時にはこの日に檀家の者が大般若經箱六個六百卷を部落内を持つて廻り最後にその年の當番の家へ持ち込んでその家で轉讀する。一年に一ヶ所だけで、當番の家は順番になつていた。これは村の祈

禱として行なわれるもので、大般若のボンブー（梵風）に當ればその年の厄をよけ病氣にならぬといひ、村人はこれを夏祈禱とも呼んでいた。又大般若の轉讀がすむと十六善神のお守りと云つて祈禱札を部落の上と下の村境の二ヶ所に立て、各家の戸口にも戸札を貼り疫病の入りこぬようにしたという。

常光寺 大分縣東國東郡國見町小熊毛 （曹洞宗）

舊曆正月五日を修正會とも「大般若」とも云つて、國見町城屋部落の使須玉男家の先代がこの日朝早くから羽織袴で正装して「大般若」を持つて村中を廻り檀徒に拜ませた。またこの日には寺で大般若六百卷を轉讀し、祈禱符の般若札を檀家へ配つた。檀家では惡魔除けにこの札を戸口に貼りつけていた。然し第二次大戰後の農地解放に依つて修正會田を失ひ、また仲須玉男家先代も亡くなりこの行事は行なわれなくなつたという。常光寺の場合には災害・惡病を年初に當つて先ず除けておくと云う豫修の行事であり先の本山寺・文珠仙寺はその期に及んで防ぎ、鎮めると云う現修の行事であるといえる。

長安寺 大分縣豊後高田市加禮川 （天台宗）

舊曆七月七日に大般若の轉讀が行なわれるがこの日を村人は七夕さまのお祭りと呼んでいる。長安寺の上方に僧形の太郎天童註(4)を祀つた權現社がありこの社の祭が七月七日であつたが、この像が僧形であることから明治の神佛分離に依つて長安寺に遷し祀られ、現在は七月七日に寺ではこの御寶前で大般若を轉讀し、一方權現社では神官が來て別に祭を行なつている。ところで加禮川區には、昔同日に太郎天童がトドロキの淵までシオクミ（雨乞）に行かれ、雨の降らぬ時は一週間も歸つて來られなかつたと云う傳承があるが、民俗學では七月七日を中元の節として祖靈祭齋

忌の開始の日と考え、また水の儀禮としての農耕儀禮の重要な日であつたと理解されていること註(6)から雨乞即ち農耕儀禮と結合した大般若轉讀の行事であるといふべきである。

以上が今回調査採録したものの概要であるが、他地方に於けるこの種の大般若經信仰について述べるならば、播磨美奈郡中吉川村法光寺の大般若經を貸出し御守とするもの註(6)、大和五條市野原靈安寺部落の周邊で、辻に祭壇を設け十六善神の畫像をまつつてそれに水をかけて雨乞をする大般若轉讀の行事、丹波龜岡市會我部町西國靈場廿一番札所穴太寺、修正會結願の新曆正月三日に行なわれる福給フクキリ大般若會、同市宮前町寶林寺で新曆九月八日藥師祭に大般若を轉讀し、村境三ヶ所に祈禱札を立てるもの、丹後與謝郡加悦谷常栖寺の大般若轉讀ののち村境に般若札を立てるもの、同地光明寺で以前に組内境の四隅に笹竹を立てて大般若を轉讀したもの、尾張赤津雲興寺の盜難除け大般若會、信州伊那谷下市田安養寺、同阿島安養寺の獅子舞大般若會註(7)、同時又長石寺で舊曆二月初午に行なわれる靈神信仰と結合した大般若會、常陸水戸市河和田天徳寺を始として關東北部地方の「おではんにや」辻祈禱と呼ばれる大般若轉讀行事註(8)等數多くのものがある。この他禪・天台・眞言の各宗有名無名の寺院で修正會・修二會に豐作豫祝即ち農耕儀禮、或は除災招福として行なわれる大般若轉讀は殆んどわが國全般に互つて見られるものである。

次に大般若轉讀の行事内容について述べるならば一般に十六善神畫像或は不動明王像又は畫像をまつつて、洗米・鹽・野菜等の生身供を供へて祭壇を設け心經を讀む中、導師は密教的修法を行じ、役僧は大般若經を開卷し、心經を讀み了ると、多くは磬・太鼓を打ちながら「大般若波羅蜜多經卷第○。」と大音聲で讀み上げ轉讀し、「降伏一切大魔最勝成就」とこゝまた大音聲で讀み了り、經本で机を打つようにして置くのが常である。このような行爲は一種の鎮魂呪術であり、般若の空思想を常民は空する呪力として理解したと考えられているのである。註(9)

ところで大般若轉讀行事の中世の宮中での場合をみるならば、看聞御記應永廿四年四月二日の條に

早旦大般若經轉讀。道場室禮。南面四間奧方北立屏風懸尺迦像。有十六善神。御香宮本尊。西脇尺迦像同奉懸。永圓寺本尊。東脇不動尊像奉懸。金岡筆。累代本尊。其前立机一脚。置佛供燈明。其前立禮盤。傍有磐台。東撤障子懸御簾。爲聽聞所。北西角間懸翠簾。爲女房聽聞所。時刻永圓寺僧侶八口參。先是於行藏庵。齊點心食之。壽藏主奉行。始之。先伽陀。次表白神分。次御經轉讀。讀畢次第卷之。予以下女中男共奉。次第六百帙讀了。心經。觀音經。眞言。次唄散華。次經尺表白。次廻向伽陀了。僧衆起座。——(下略)

と詳しく記されているが、中世上流社會に於ける場合も現在一般農民層を對象に行なわれる場合も、精疎の差こそあつても、その行事の基本的内容に於ては變化は見られないといえるであらう。

三

さて前節に於て述べた大般若經信仰の内、民俗的に注目すべき諸點を類別して示すならば

- (1) 豐作豫祝・雨乞など農耕儀禮的なもの、
 - (2) 災難・盜難・疾疫などを除ける疫(厄)除け受福祈禱的なもの、
 - (3) 村を巡回し、辻或は村境に惡靈をひきよせずめ、はらい出す鎮魂鎮送呪術的なもの
- の三項になるが、これらが單に各々一項目だけにとどまるものではなく互いに關連しているのであつて、この點からも大般若經信仰がわが國固有の民俗信仰に廣く且つ深く根ざしていることを知り得るのである。
- とここでこのような大般若經の民俗信仰を古代の文獻記録と比較してみるならば、國家行事としての大般若經信仰もこれと多くの共通性のあることに氣付くのである。すなわち續日本紀神龜二年正月十七日の條の
- 於_三宮中及大安、藥師、元興、興福四寺、轉讀大般若經、爲_下消除災害、安_上寧國家也
- とあるのも、類聚國史卷一七三・疾疫天長元年四月廿八日の條の

令_レ十五大寺并五畿内七道諸國、奉_レ讀大般若經、防_レ疫旱_也、
 とあるのも、同天長三年六月六日の條の

屈_二一百僧於御在所及大極殿_一、限_三三箇日_二、轉_レ讀大般若經、防_レ疫厲、祈_レ豐年_{一也}

とあるのも全て疫旱、災害を防ぎ豊作を祈願するものである。また民俗學上では上代に宮中大極殿、紫宸殿或いは清涼殿で春秋二期二月八月或は毎季二、四、八、十の各月に行なわれた季御讀經も、四月の大安寺大般若會も、七月の藥師寺大般若會も、これらの月々が農耕と深い關係のあるところから、農耕儀禮的であるとされている。註90また御靈會の初見の記事として有名な、三代實錄貞觀五年五月廿日の條の神泉苑御靈會には

(上略)―靈座六前、設_レ施几筵_一、盛_レ陳花果_一、恭敬薰修、延_レ律師慧遠_一、爲_三講師_一、演_レ說金光明經一部、般若心經六卷_一、―(中略)―所謂御靈者崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、伊豫親王母_{〇吉}及觀察使橘逸勢、文室宮田麻呂等是也、並坐_レ事被_レ誅、冤魂成_レ厲、近代以來疫病繁發、死者甚衆、天下以爲此灾御靈之所_レ生也、始_レ自_三京畿_一、

爰及_レ外國_一、每_レ至_三夏秋節_一、修_レ御靈會_一、往往不_レ斷、或禮_レ佛說_レ經、或歌且舞―(中略)―遐邇因循漸成_三風俗_一、今茲春初咳逆成_レ疫百姓多斃朝廷爲_レ祈至_レ是修_三此會_一、以賽_三宿禱_{一也}

とあるが、これは現在毎年七月十七日に行なわれている京都八坂神社の祈園御靈會の先蹤をなすもので、御靈すなわち疫神を鎮魂・鎮送する爲に行なわれたものである。註91この神泉苑御靈會に般若心經六卷が講説されているのは大般若經信仰のあらわれとみてよいであろう。また疫神鎮魂という點で同一觀念に由来するものと見らるべきものに道饗祭があるがこれを文獻についてみるならば、續日本紀天平七年八月十二日の條に

勅曰如聞比日太宰府疫死者多、思欲_下救_レ療疫氣_一以濟_レ民命_一是以奉_三幣彼部神_一爲_レ民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺讀_三金剛般若經_一仍遣_レ使賑_レ給疫民_一、併加_三湯藥_一、又其長門以還諸國中若介專齋戒道饗祭祠

とあり、道饗祭は六月、十二月の晦日に京城四隅の道上に於て鬼魅の外から来るものを京師に入れしめぬために、あらかじめ道にこれを迎えて鎮めてしまふものであるが、この場合は臨時に行なわれたものようである。所で右の道饗祭に金剛般若經が讀誦されているが、金剛般若經と云う場合一般にわが國では羅什譯を指すのであつて所謂舊譯であるが、大般若經といへば一般に玄奘完譯の六百卷を指し所謂新譯であつて漢譯の過程に於て問題は残るとしても周知の通り、金剛般若經は大般若經第二處第九會第五百七十七卷に當るもので、玄奘は羅什譯をそのままここに挿入しているから、大般若經六百卷の一部であることは疑いないところで、道饗祭に於いて大般若經信仰があらわれているとみてよいであろう。この道饗祭は現行の辻祈禱大般若及び村境に祈禱札を笹竹にはさんで立て惡靈を鎮魂する行爲と全く同型であることに注意すべきである。

更に、中世の記録として興味ある太宰管内志所收の「安貞二年六郷山諸勤行目錄」には

末山分一兩子寺——(中略)——一日轉讀大般若會請僧廿人云云

中山分一長石屋——(中略)——一日轉讀大般若會請僧廿人十月五日動之云云

中山分一(無動寺山号)小岩屋山——(中略)——一日轉讀大般若會請僧廿人九月九日

中山分一(靈仙寺山号)夷石屋——(中略)——一日轉讀大般若會請僧廿人云云

中山分一(千燈寺山号)千燈山——(中略)——一日轉讀大般若一部請僧廿人云云

とあつて、これらの多くが十月に行なわれていることから上代の季御讀經の中世に於ける殘存形態と見るべきであろう。また太宰管内志所收の「弘安七年異國降伏卷數目錄」には

中山分長石屋奉勤修七策日不動行法每季奉轉讀大般若經每季奉講讀仁王經一百座每季奉讀誦觀世音經一千卷奉讀法華八講

問答講云云

とあるのをはじめ、無動寺、靈仙寺、千燈寺、小城寺の項にも同様の記事があり、これらは明らかに文永、弘安の役後の未だ安定せぬ國內狀勢を反映して各地方に於いても盛行された異國降伏祈禱であることは疑いないところである。また太宰管内志所收の六郷山年代記には

文永子年九勅自筑前牛倒亂惣國牛死依^(元)之六郷山衆徒先達八百三十人於^(長安寺)彌山一^(長安寺)大般若三千部仁王經一萬卷而御祈禱相叶施米一萬石青銅萬貫出^(元)之

とあつて、恐らくこの年牛の流行病があつて多くの牛が倒れたのであろう。そこで大般若經、仁王經が讀誦されたのである。

右に示した如く中世、九州國東地方に於て大般若轉讀の盛行されていたことを充分推定することが出来るのであるが、瀬戸内海を経て互いに交流のあつた四國豫州地方に於ても同様に近世以前にも大般若經信仰の存したことはほば察せられるのであつて、このような民俗信仰が近世には寺檀關係の上に定着固形化し一般庶民層に受容せられ現在に至つていると考えられる。

以上大般若經が農耕神すなわち祖靈をまつる農耕儀禮、及び御靈・疫神信仰というわが國固有の民俗信仰と上代以來固く結合していることを述べたのであるが、農耕儀禮に祖靈鎮送の觀念の存することと、^(註)御靈會・道饗祭が、御靈・疫神を鎮魂鎮送する觀念をもつ祭であることと、大般若經に鎮魂呪術的行爲と呪力があると觀念されていることを考へ合せば、大般若經が民俗信仰と結合するのは必然的であつたといひ得るのであろう。

おわりに、直指人心、見性成佛底を基調とする禪宗に於ても、わが國の各地にこのような大般若經の民俗信仰が數多く現存することは、深遠宏大を標榜しつつもなおかつ庶民に根深く教義を理解浸潤させるためには、一面低俗と考へられる右の如き信仰をもその道程として行ひなければならぬことを指摘しておきたい。

註(1) 印度學佛教學研究第三卷第一號所收

- (2) 柳田國男氏 歳時習俗語彙、日本の祭、田社考大要（民間傳承一五―二）倉田一郎氏 農と民俗學 早川孝太郎氏 農と祭
 岩島銀次氏 田の神 折口信夫氏 年中行事等參照
- (3) 卯月八日も單に八日ともいい、この日に近畿・四國・中國地方では八日花・高花・天道花（天ちぢぢ）といつて、つつじ、うつきなどの花枝を高竿につけたり門口に挿すことがある。一方この日に兵庫縣氷上郡では新佛の墓參をし、花折始めともいい、新瀧縣刈羽郡内ではもとこの日に、山に登り花を折つて歸り佛壇に供える慣習もあつた。古代に於ては祖靈と殺靈（田の神）と山の神は全て一體であり、四月は丁度農耕開始の月でもあつて、花枝をその依り代として農耕神のまつりを行なつた日である。柳田國男氏 先祖の話、祭日考、卯月八日（郷土研究四〇―十一）等參照
- (4) 不動明王の像らしく後頭部に大治五年の銘がある。和歌植太郎氏監修「くにさき」參照
- (5) 七夕を星祭、乞巧奠の祭とする中國傳來の習俗と共に、これらとは別に全く異なつたわが國古來の七月七日の祭がある。すなわちこの日を全國的に「七日盆」、「盆はじめ」などと呼んで墓掃除をしたり、墓道を作る等の祖靈祭と關連の深い日である。また井戸さらえや虫拂いを行う地方も多くあり、また人々や家畜の水浴する日としている地方や、女が髪を洗う風習の存する所もある。また七夕雨といつて短冊が流れるほど雨が降るとよいという所もあり、この日には三粒でも雨が降るといふ傳承もある。折口信夫氏 七夕の話（古代研究Ⅱ所收）柳田國男氏 歳時習俗語彙等參照
- (6) 兵庫縣史跡名勝天然記念物調査報告第九輯一五―六頁
- (7) 拙稿 信州伊那谷に於ける大般若經信仰について（印度學佛教學研究第十卷第二號）參照
- (8) 五來重氏 民俗信仰としての大般若經（印度學佛教學研究第三卷第一號）
- (9) 五來重氏 前掲論文
- (10) 堀一郎氏 我が國民間信仰史の研究（一）九二―三頁 柳田國夫氏 祭日考等參照
- (11) 柴田實氏 祇園御靈會（京大文學部讀史會 國史論集Ⅰ所收）參照
- (12) 五來重氏 農耕儀禮と念佛（宗教研究一六六號）參照